

The colors of London

MITSUBOSHI Muneo

Key words: London, color, landscape, color harmony, beauty

Abstract

The photos were taken in London and the suburbs, September, 4th to 9th, 2007, and were analyzed in terms of color harmony and other stand of points on color. The airport, the streets and the buildings, the street furnitures and the gardens were taken as samples, some of which were compared with those in Japan.

It seems to the author that the beauty is, very roughly, felt by the Western culture for the field composed of symmetry, having strong perspective and linearity. On the other hand, in our culture the beauty exists in the field having no or weak symmetry, nor strong perspective and linearity. Those two kinds of beauty were briefly argued in relation with our visual and tactile sensations.

Finally the City of Working which was located about 50km west London was introduced to show the color planning of the city. The city was harmonized with the color by blue, distributing blue colors among various zones of the buildings and street furnitures including dust boxes.

ロンドンの色彩

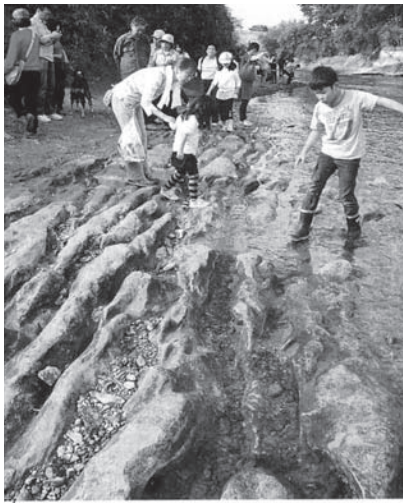
三 星 宗 雄

キーワード：ロンドン、色、色彩、景観、色彩調和、美

はじめに

2009年9月21日岩手県花巻市の北上川で起きた出来事が各TV局で放映された。図1は翌日の新聞に載った現場の写真である（2009年9月22日読売新聞）。普段は北上川に沈んでいる白い泥岩層の河岸が、国土交通省の粋な計らいで宮沢賢治の命日にあたる21日だけの1日限定で、上流のダムの放水量を下げたために現れたのである。宮沢賢治はこの河岸を「イギリス海岸」と呼んだ。こうした白い泥岩層の海岸はイングランド南部に見られるという（ドーバー海峡のWhite cliffか）。英国には行ったことがなく、おそらく写真か何かで見ただけであろう賢治の、自然の風景に対する感性を見る思いである。風景というのはやはり詩人の感性に必ず引っかかるものであるとあらためて思うのである。風景のどこが詩人の魂を捉えるのかは筆者にとって永遠のテーマであるが、その前に非詩人的な魂の持主であるわれわれは、詩人はこういう風景に惹かれることを「学んで」おくべきであろう。

別なプロジェクトのためではあったが、ロンドンを訪れた。英国を訪



北上川上流のダムの放水量調整で出現した「イギリス海岸」(21日、岩手県花巻市で) 藤吉恭子撮影

宮沢賢治の短編に登場し、岩手県花巻市の北上川に沈んでいる「イギリス海岸」が21日、賢治の命日に合わせて1日限定で復活した。20日夜から上流のダムの放水量を通常の5分の1に抑制し、

岩手・花巻 北上川

1日限り「賢治の海岸」

終戦の頃までの風景を再現。岸に沿って無数の溝や穴を刻んだ白い泥岩層が現れ、早朝から県内外の賢治ファンが詰めかけた。夫婦でファンだという栃木県足利市の小泉富茂さん67、久子さん62は「よみがえった風景と一緒に、賢治がそばに来ていろいろ」と話していた。

図1 北上川のイギリス海岸 (読売新聞 9月22日)

れるのはこれが二度目であった。前回は二十数年前ケンブリッジ大学で開催された色覚研究関連の学会からの帰りにロンドンに宿泊した時である。当時の記憶はほとんどないが、ケンブリッジ大学の構内で拾った数十個の石ころは宝物として今でも大学の研究室に飾ってある。何と言ってもケ大学は色覚研究の祖ニュートンの大学なのである。この時初めて構内にある博物館で、ニュートンがあ有名な実験に使ったプリズムを見た。

今回は同じ色ではあるが、まったく異なった視点からロンドンの街を眺めることとなった。それは景観あるいはアメニティという視点だ。景観とよく似た概念に風景がある。風景は五感で感じるものであり、景観はもっぱら視覚で感じるものという区別があるが(勝原、1999)、ここでは区別しないで用いる。

風景という言葉は英国のローマン派詩人ワーズワースを思い起こさせる。残念ながらワーズワースが生きたウィングミア地方には行くことは

できなかったが（何といてもロンドンから400キロ離れている）、その思想は現在の景観の思想あるいはアメニティの思想に受け継がれている（中村、1982）。

アメニティの思想も英国が発祥の地である。1846年世界で初めて、より良い地域づくりのための組織であるローカル・アメニティ・ソサエティ（local amenity society）が生まれたのはドーバー海峡に面したシドモスであり、当時はシドモス改善委員会と称された（西村、1989）。驚くべきは、その2年後の1848年に公衆衛生法が制定され、さらに1907年には早くも広告規制法が施行された（木原、1989）。それは1947年に改正・強化され、「環境大臣はアメニティと公共の安全にとって必要とみとめるときは、広告の掲示を規制または禁止するための規則を定める広範な権限を持つ」と定められたのである（木原、1989）。我々の生活において、風景および風景の中における広告というソフトウェアの持つ重要性が早くも認識され始めていたのである。

宮沢賢治があこがれた英国の自然風景、そうしたものを背景にみずからそれを守り、周囲との調和を求めようとするアメニティの思想を確立した英国。今回はそうした眼を持ってロンドンの街の色彩を眺めた。ロンドンの色彩について、わが国あるいは中国に見られる色彩を援用しつつ、色彩調和論やアメニティを構成する1つの要素である街並みの色彩などの観点から分析を試みるのが本報告のねらいである。さらに西欧とわが国における美的な感性の違いなどについても分析を試みた。調査期間 2007年9月3日(月)～9月9日(日)。

1. 空港（ヒースロー）

海外では米国の空港を思い出すことが多いせいか、意外に狭さを感じ



図2 ヒースロー空港



図3 成田空港



図4 JR 根岸駅



図5 中国福建省廈門空港

た。表示板の色彩は見事に色彩心理学のテキスト通りの、黄と黒の配色である（図2）。色の明視性が高すぎるのは黒地に黄だが（塚田、1978）、黄色地に黒はそれに次いで明視性が高い。しかしあまりにも目立ちすぎて一種わずらわしさを感じる。むしろ成田の色彩の方が落ち着いたのではないか（図3）。成田はどちらかというと米国風の色彩である。ちなみに筆者が住む横浜根岸の駅も何やらヒースロー空港風の色彩になった（図4）。図5は中国福建省廈門空港のコンコースである。青が冴えてすばらしい。当地では青色は公安関係の色になっているようだ（三星、2010a）。



図6 タクシー



図7 お馴染みのダブルデッカー



図8 遠景としてのバス



図9 パトカー

2. 公共輸送機関

ロンドンは案外車の色は鮮やかである。よく知られたバスはすべてではないにしても真紅であるし（図7、8）、タクシーも黒塗りが多いが、カラフルなものが結構多い（図6）。パトカーでさえも極彩色である（図9）。バスはラッピングになっている場合も少なくない。

図10は郊外へ向かう中距離電車である。このようなカラフルな電車ばかりではないが、この車体に見られる原色の青と黄（あるいはオレンジ色）の配色はわが国ではめずらしいのではないだろうか。図11は地下鉄の車内であるが、ここでも青と黄とのコントラストが見られる。



図10 ロンドンから郊外へ向かう中距離
電車



図11 地下鉄の車内

Judd (1955) は西欧の多くの文献を比較し、色彩調和の原理として下の4つの原理を挙げた。

- (1) 秩序性の原理 (principle of order) …色と色との間に何らかの秩序がある。
- (2) 類似性の原理 (principle of similarity) …色と色の間に類似性がある。
- (3) 馴染みの原理 (principle of familiarity) …普段見慣れている色に逆らわない。
- (4) 明瞭性の原理 (principle of clarity) …色と色との間に適度な差があること。

われわれ日本人にとって (1)、(2)、(3) はそれほど抵抗なく受け入れることができるであろう。しかし (4) はどうであろうか。「色と色との間に適度な差がある」配色の極端な場合は補色同士（たとえば青と黄のような）によるものである。実際よく知られた色彩調和論においても、そうしたコントラストの調和に最高の得点が与えられている (Moon & Spencer, 1944a;b;c)。おそらく日本人の感性としてはすぐには受け入れられない配色ではないだろうか。

実は我が横浜市営バスも配色的には青とクリーム色（広い意味での黄

色)という補色配色である。筆者にはこの横浜市営バスの配色は大変すばらしいものであると思えるのだ。おそらくお互いに補色と言っても、彩度や明度がうまく調和していたり、あるいは色相が微妙にずれていたりにしているのであろう。

公共輸送機関はそこに住む人々が否応なく目にする対象である。そうしたものに対してはある種の「愛着」があり、たとえば旅行から帰った時などそれらを目にするだけで安堵感がある。そういう意味で公共の事物の色彩に対しては十分な配慮があるべきであろう。

ところでアメニティ (amenity) はもともとラテン語の amare (愛、愛着) から来ているという (酒井、1989)。公共輸送機関は動く物体ではあるが、たとえば村の鎮守の森や街のにおいなどと同じく、間違いなくアメニティを構成する要素なのである。

3. ストリートファーマニチャー

道路に面した植栽、電話ボックス、花壇、ベンチ、表示板などを一般にストリートファーマニチャーと呼ぶ。ロンドンの電話ボックスは強烈な赤であった (図 12)。わが国では周囲に溶け込ませ、なるべく目立たない色になりつつあるが、ロンドンでは「真逆」である。ロンドンは街全体がグレーがかっており、そうした中で二階建てバスや電話ボックスの真紅の色はアクセントカラーとしての役割を果たしている。

一方歩道に設置されたベンチやゴミ箱はさすがに背景に溶け込む色彩である (図 13、15)。この場所はテムズ川沿いの観光スポットであり (背後に観光バスが見える)、特別であるかも知れないが、ベンチにはすばらしいデザインが施されていることが分かる。手前の街灯の支柱も単なる支柱ではない。



図 12 公衆電話



図 13 道路わきのベンチ



図 14 各種標識



図 15 ゴミ箱（見慣れた人が見える）

こうしたデザインあるいはアートの活用はどちらかと言うとわが国では馴染みがうすいのではないだろうか。たとえば沖縄に見られるシーサーは明らかに見る人の心を和ませる（三星、2007）。もともとは宗教的なものであったかも知れないが、今は別な、しかもすばらしい役割を演じている。フランスでは公共の建造物を作る時アンブーサンという制度によって、工費の1%を芸術家のために使わなければならないという（尾崎・佐久間、2006）。アートあるいはデザインが持つ「遊び」の感覚をわれわれはもっともっと享受したいものだ。



図 16 「ガーキン」ビル



図 17 バッキンガム宮殿

4. 街に見るアート、デザイン

ロンドンに限らず西欧の街にあっては、そのアートあるいはデザインには目を見張るものがある。街中アートだらけという感じがある。先にも触れたが、フランスでは公共の建造物の製作には必ず芸術家を参加させなければならないという。こうした仕掛けによってそこに住みあるいは通過する人々の心が癒され、多少の現実離れを生じさせるのであろう。そうした「一時現実を離れる」ことはいろいろな意味で大事なことだと思うのである。

図 16 は通称「ガーキン（ピクルスに用いる小ぶりなきゅうり）」と呼ばれる高層オフィスビル（30 St Mary Axe）である。周囲の環境とマッチしているかどうか疑わしい気もするが、将来この地域をアート&デザインの街にしようという都市計画があるのかも知れない。最近東京新宿にもモード関係の学校によるこれとそっくりの建物ができた。ただ二番煎じなのが残念である。通常の建物（と言ってもバッキンガム宮殿）においてもそのデザインはすばらしい（図 17）。石の文化の象徴であるが、重厚そのものである。



図 18 ブラックフライヤーズ橋



図 19 同 橋脚部

図 18、19 はテムズ川にかかるブラックフライヤーズ橋である。橋桁に見られるデザインはすばらしく、重厚そのものである。この橋にはもう一つ話がある。色彩心理学のテキストには、すべてではないが、昔この橋は黒で塗られていて、自殺の名所として有名であった。しかし、橋の色を明るい緑色に塗り替えたなら自殺者が三分の一に減った、とある。色彩が「たかが色彩、されど色彩」の例として挙げられていたのである。現在は黒でもないし、明るい緑でもない。またこの橋のいったいどの部分の色を見て自殺を思いとどまったのかは良く分からなかった。と言うのは橋の上に立つと、目に入る色は大部分が道路のグレーであり、わずかに細い線として欄干に赤色が見えるだけだからである。昔は黒や明るい緑色がもっと大面積で用いられていたのかも知れない。ちなみに「フライヤーズ (fliers)」という名前が「飛び込む人」から来ているのかどうかは定かではない。

テムズ川に架かる橋は案外原色が多い (図 20)。これは川を上下するさまざまな船のための安全色になっているものと思われるが、いずれの橋も重厚さを感じさせる。東京の隅田川の橋には残念ながらこのような橋はない。

横浜に「アート & デザイン」をテーマとした地区があるのは案外知



図 20 同橋の上



図 21 テムズ川にかかる橋

られていない（横浜市都市計画局、2002；三星、2006）。みなとみらいに隣接したポートサイド地区がそうである。確かにその地区は空と海を表すブルーグリーン系の色と大地を表すテラコッタ系の色で調節され、さわやかな気分にさせてくれる。しかし「アート & デザイン」のコンセプトはそれほど感じられない。今後の計画に期待したいと思う。

5. 街の色

さて街の色彩である。図 22 は官庁街である。官庁街は一番整えられた街の顔なのであまり参考にならないかも知れないが、しかしわが国のそれと比べた時やはり異なった印象を覚えるのではないだろうか。

芦原（1979）は街の視覚的な構造として、西欧の街（または町でも）においては、道路と建物の外壁が、いわゆるゲシュタルト心理学の「図と地」の関係になっている。それに比べてわが国においては、看板や突出物があるために外壁の輪郭線が不明になり、そのためくっきりとした「図と地」の関係ができにくいと論じた（図 24 を参照）。三星（2006）は「図と地の分化」は視覚が物体を認識する時の不可欠の出来事であるから、その条件が成立していることは「視覚的欲求」を満たし、それは



図 22 官庁街



図 23 住宅街？

快適な景観につながるとした。図 22 はそれを示している。

また芦原 (1979) はさらに道路の幅 (D) と建物の高さ (H) の比 (H/D) が重要な要素であり、 $H/D = 1.0$ の時良好な景観を形成するとした。図 22 は、道路の幅に歩道を加えるとほぼ比率が 1.0 となり理想に近い視覚的な構造となっている。

図 23 は住宅街である (と思われる)。多くの人は非常にすっきりとした印象を持つに違いない。電線がないのである。この架空電線の地下埋設についてはただただ驚くばかりである。ヨーロッパの人々がいかに街 (町) の景観を守る努力をしてきたか、さらには架空電線がいかに街の景観を損ねるかを認識していたかの最大の証拠と言える。筆者の好きな画家佐伯祐三が描いた 1930 年代のパリの場末の風景画にもすでに電線はない。

ちなみに架空電線がいかに街の景観を損ねるか、図 24 と図 25 を比較して欲しい。わが国では架空電線の地中埋設化はやっと始まったばかりである。

図 26 から 33 はマンションや住宅、コンビニ等の建物である。多くの建物で 1 階部分が階上の部分と色が異なり、またかなり鮮やかな色になっている場合が見られる (図 26、27、32)。これはおそらくロンドン市



図 24 架空電線のある風景
(横浜市鶴見区豊岡町)



図 25 架空電線のない風景
(福島県会津若松市)



図 26 マンション



図 27 マンション？オフィス？
一階はスターバックス



図 28 住宅（現博物館）
フロイトが晩年を過ごした家



図 29 スターバックス



図 30 スターバックス



図 31 マック



図 32 コンビニ



図 33 すし店(この色がすしのイメージ?)

の行政指導によって、2階以上は遠景としての街の景観を形成するものとして色をある範囲内に収め、1階部分を近景として色の規制を緩和し、街に色彩的な変化を与えようとしているためと思われる。

美というものを変化（多様性、複雑性）の中の統一（秩序、単純性）、またはそれらの間の適度なバランスとする考え方は現在この分野では一般的になりつつある。その具体的な表れであろう。わが国でもこうした色彩ガイドラインを採用しているところがある（たとえば 那覇市）（三星、2010b）。しかしそれにしても図 32 にあるようなコンビニの色はどのようなのであろうか。アクセントカラーについては市による規制はないと考えざるを得ない。

しかしスターバックスコーヒーやマクドナルドにはさすがに色彩に対

する配慮が見られた。マクドナルドの看板については配慮があるのかどうか微妙ではあるが、その場所がターミナル駅の構内であることを考えると、そのあたりが限界と言えようか。

それにしても我が国のすしのイメージがこのような赤と黒とは（図 33）。これが一般的とはとうてい思われないが（いや案外一般的かも知れない）、これとは別にこちら側のイメージと向こう側のイメージとは時にかなり別なものだということを最近強く感じた（三星、2010a）。やはり色が持つ記号性は世界でかなり異なるようだ。余計なことだが、当時ポンドが高く、このすし店ではやっと3品食べるのが限界であった。しかもたいしたことのないネタ。

6. 青の街

ワーキング（Working）市はロンドンから西に数十キロばかり離れたところにある人口10万程度の町である。ここには地球温暖化防止のための取り組みを行っている民間の会社があり、本来のプロジェクトの仕事としてそこを訪れた。その町が偶然街の色彩計画に取り組んでいる町であることが分かったのでここに記しておきたい。街の色彩への配慮は地球温暖化防止とは直接的なつながりがあるとは思えないが、環境問題としては同じである。

この町は青色で統一されていた。そうした場合、街がどのようなイメージになるか、図 34 から 39 まで眺めていただきたいと思う（残念ながら本誌は白黒印刷なので、そのまま伝えることは困難だが）。外壁の茶色と鮮やかな青色のコントラストが美しい。やはりコントラストの配色の美があるのかも知れない。良く見ると、この配色は筆者が賛嘆して止まない横浜市営バスの配色なのである。やはり原色同士の補色配色では



図 34 青色のフレーム



図 35 市役所か安定所の青色のエントランス



図 36 青色のエントランス
(建物名不明)



図 37 青色のショッピングモール
入り口



図 38 青色のバリアフリー設備



図 39 青色のゴミ箱？



図 40 少し離れたところにあったマックの看板の色はあのマックの色であった。



図 41 佐伯祐三の世界？

なく、やや彩度を抑えた茶色またはクリーム色がいいのかも知れない。

しかし、青の街から少し離れた場所には良く見慣れたあのマックの看板があった（図 40）。またその隣にはほとんど無彩色に近い街区があった。そこはもしかしたらワーキング市の行政区域外かも知れない。しかしこれだけ色がないと、鮮やかな赤や青が欲しくなるのは分かるような気がする。

7. 庭園

最後に庭園について触れておきたい。図 42 と 43 はケンジントン公園に隣接したある庭園である。シンメトリカルなその構造は西欧の庭園に特徴的なものである。またパースペクティブの効いた構図および直線性もまた西欧の庭園の特徴である。そうした構造はイタリアから輸入された造園技法がフランスで進化し、ルイ王朝のベルサイユでほぼ確立されたという（Benoist-Mechin, 1975）。

シンメトリー性はともかく、パースペクティブと直線性は視覚またはそれをもたらす光の性質に起因している。こうした構造が美的な構造で



図 42 庭園



図 43 庭園



図 44 英国式庭園（ケンジントン公園内）

あるのなら、西欧の美とは視覚的なものと考えられる（三星、2009）。したがって西欧の美は眺められるもの、あるいは眺める主体から離れたところに存在するものと言えよう。

また視覚の感覚は進化の過程で最後に備わったものであり、人間においてもっとも発達している。その意味で西欧における美は進化的なものと言えるのではないだろうか。

一方わが国の庭園の多くはそうではない。図 44 はいわゆる英国式庭園である。英国式庭園は風景式庭園とも回遊式庭園とも呼ばれ、決してシンメトリー、パースペクティブ、直線性で表されるものではない。もちろん日本の庭園はこちらに近い。図 44 を見て、わが国の庭園あるいは河景と直感した読者も多いのではないだろうか。こうした非シンメト

リー、曲線、弱いパースペクティブなどは視覚ではなく、それは触覚的な特徴である（三星、2009）。いわばわが国の庭園に見られる美は、触って感じるもの、あるいは手が離れれば消え失せてしまうものと考えることができよう。上に述べた西欧の美が進化的なものであるのに対し、触覚的な美は、視覚が進化する以前からあり、視覚の進化の母体となったと言う意味で、いわば根源的な美とでも言えるのではないだろうか。

しかし不思議なのは、英国にはその両方があるという点である。10年ほど前にアルゼンチンで在外研究を行っていた時、知り合いになった英国人が、「自分たちは英国全土を開発し、ゴルフ場のようにしてしまった。それが大変恥ずかしい」と言っていたのを思い出す。ターナーやワーズワースを持つ英国人には自然回帰のような感性があるのだろうか。そして賢治があこがれたイギリス海岸は現在も健在なのだろうか。

謝辞

今回の調査は環境省地球環境研究総合推進費戦略研究開発プロジェクト（テーマサプリーダー：神奈川大学松本安生）のロンドンにおける聞き取り調査に伴って行われたものである。結果的に旅費の援助を受けたので、ここに記して感謝したい。

引用文献

- 芦原義信（1979）「街並みの美学」、岩波書店。
- Benoist-Mechin J.(1975)L’Homme et ses Jardins ou Les Metamorphoses du Paradis terrestre, Paris.（河野鶴代・横山正訳「庭園の世界史」、1998、講談社）。
- 勝原文夫（1999）「環境の美学—ムラの風景とアメニティ」、論創社。
- 木原啓吉（1989）環境の思想・アメニティについての一考察、AMR

(アメニティ・ミーティング・ルーム) 編「アメニティを考える」、8-14、未来社。

三星宗雄 (2006) 「環境色彩学の基礎」、マックローリン出版。

三星宗雄 (2008) 沖縄の色、神奈川大学人文学研究所報 41, 123-132.

三星宗雄 (2009) 風景の理解、神奈川大学人文研究 168, 1-28.

三星宗雄 (2010a) 中国福建沿岸部の色彩と景観、神奈川大学人文研究 169, 1-23.

三星宗雄 (2010b) 一般市民から見た沖縄の色—那覇市および近郊における聞き取り調査—、神奈川大学人文学研究所報 43 (印刷中)。

Moon P. & Spencer D. E. (1944a) Geometric formulation of classical color harmony. J. Opt. Soc. Am. 34, 46-59.

Moon P. & Spencer D. E. (1944b) Area in color harmony. J. Opt. Soc. Am. 34, 93-103.

Moon P. & Spencer D. E. (1944c) Aesthetic measure applied to color harmony. J. Opt. Soc. Am. 34, 234-242.

中村良夫 (1982) 「風景学入門」、中公新書。

西村幸夫 (1989) 英国ローカル・アメニティ・ソサエティの活動—歴史と現況—、AMR (アメニティ・ミーティング・ルーム) 編「アメニティを考える」、15-30、未来社。

尾崎真理+佐久間彰三 (2006) 「風土色による色彩学のすすめ」、彰国社。

酒井憲一 (1989) 都市時代の闘うアメニティ、AMR (アメニティ・ミーティング・ルーム) 編「アメニティを考える」、145-156、未来社。

塚田 敢 (1978) 「色彩の美学」、紀伊國屋書店。

横浜市都市計画局 (現横浜市都市整備局) (2002) 「ヨコハマポートサイド アート & デザインの街」

読売新聞 2009 年 9 月 22 日記事および写真